天文学とプラネタリウム 第63回

www.tenpla.net

■「六本木天文クラブ」が立ち上がりました！

今月のお題

天文学は社会に必要か？

せっかくの世界天文年ですから、こういったテーマもじっくり考えてみたい今日この頃。

高梨直紘（国立天文台 光赤外研究部 研究員）
平松正顕（台湾 国立清華大学）

先日、東京都北区にある王子小劇場にて、劇団てがみ座による「ありふれた惑星」という劇を見てきました。舞台は2部構成で、前半部では天文学を生業とするポストドクターとその奥さんのすれ違いと再生の物語、後半部は町工場を舞台に厳しい状況にもたくましく生きる物語で、たいへん面白く観劇しました。実はこの劇、天プラでも取材に協力し、台本作りをお手伝いさせていただいたので、内容は身につまされることも多くゾクゾクしながら観ていました。面白かったです。

特に印象に残ったシーンのひとつに、町工場を引っ張る若い女社長が、「うちで作った部品を宇宙に飛ばしたい」と言ったシーンです。天文宇宙が、この厳しい社会状況の中でもしっかりとその歩みを先に進めることのできる理由のひとつは、こういった宇宙に対する憧れにあるのだなぁと、改めて思い知らされたのでした。

しかしながら、それって、天文宇宙を生業としている人間にとっては都合の良い話ですが、本当にみんなそう思っているのかな？？というのが、天プラ的には気になるところです。現在建設中のALMA望遠鏡や、その先にある超大型望遠鏡の計画は大金を投資しないと実現できません。例えば高齢者医療や社会福祉の拡充が叫ばれる時代に、果たして天文学はどれほど必要なのでしょうか？

天文学は社会にどれほど必要か

この問いに対しては、さまざまな答えがあることでしょう。天文学を生業としている人間の多くにとって、天文学は社会における最重要課題ですが、まったく別の分野、例えば貧困撲滅などの活動に関わっている人たちにとって、最重要課題であることはないでしょう。もっと難しいのは、天文学あるいはその教育普及に関わる人たちの間でも、さまざまな考え方がありうる点です。お互いの考え方の違いをよく理解し、互いの立場を尊重することで、より満足度の高い天文ライフが送れるのではないか。そのように私たちは考えています。

そのようなわけで、今夏、京都で行われる天文教育普及研究会の年会にて、まずは天文学に関係する人たちがお互いにどのような考え方をもって天文ライフを送っているのかを明らかにするシンポジウムを開催します。会員外でも参加は自由ですので、興味がある方はぜひ参加されてみては？詳しくはhttp://tenkyo.net/をご覧下さい。

台北101の屋上で写真を撮影する平松（左）と名古屋のサイエンスカフェでMitakaの解説をする高梨（右）。高梨は4月から所属部署と身分が変わって、国立天文台の光赤外研究部ハワイ観測所の研究員になりました。でも、相変わらず三鷹勤務です。